

# D. H. ロレンスの収支決算：1926-27

—Villa Mirenda 以降の支出を中心に

市川 仁

<目次> はじめに

- 1 支払金額，鉄道運賃および為替レートについて
  - 2 ミレンダ荘までの旅
  - 3 ミレンダ荘の家賃
  - 4 ラヴェロまでの旅
  - 5 ラヴェロからローマへの徒歩旅行
  - 6 古墳墓めぐりの旅からミレンダ荘への帰宅まで
- おわりに

## はじめに

We are leaving here for Paris next Tuesday, 28th. so I expect we shall be at the Villa Mirinda by October 2nd, as we have cut out Baden.

(No.3845 Olwen Bowen-Davies 27 September 1926)

D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) は1926年10月4日からイタリアのフロレンスの南西約7マイルにあるミレンダ荘 (Villa Mirinda) と呼ばれる古い家に本格的に住み始める。<sup>(1)</sup> 年間家賃は「たったの3,000リラ」で1ポンド122リラとしてポンド換算すれば約24ポンドであった。<sup>(2)</sup> ロレンスとしては比較的長い滞在で1928年6月まで住むことになる。<sup>(3)</sup>

ここでの大きな仕事のひとつは、ここを本拠地として書いた最後の小説『チャタレイ夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*) である。最初は私家版としての出版だったが、この出版はロレンスにとってひとつの賭けともいえるものであった。ロレンスの残した「覚え書き」(“Memoranda”)によれば、<sup>(4)</sup> ジウンティーナ印刷所 (Tipografia Giuntina) からの請求書は値引き後の『チャタレイ夫人の恋人』の純粋な出版費用を15,000リラとしている。これは1ポンド92リラ (このころのレート) としてポンド換算すれば約163ポンドである。また郵送料などの諸経費を含めた出版経費を表すものと思われる “total cost—£252 (not including Pino)” の記述にある “£252” という金額は、たとえばこの時代に一番近い1924年当時の法廷弁護士の年収が1,124ポンド、医者<sup>(5)</sup>の年収が756ポンド、技師が368ポンド、銀行員が280ポンド、バスや鉄道の運転手が190ポンドであったことなどから考えれば、出版に対するこの投資は収入が不安定な作家が負うにはかなり大きな賭けであったことがわかる。

しかし結果的にはフロレンス版の出版は大成功で、「覚え書き」には予約者を含め購入者や購入希望者の名前がずらりと並べられている。<sup>(6)</sup> これを機

に、それまでは常に経済的に貧窮していたロレンスが初めて1,000ポンド以上もの大金を手にするようになる。さらに『チャタレイ夫人の恋人』はフロレンス版のみならず廉価版、パリ版、翻訳版などの形を取って次々と出版され、ロレンスのふところに大金を転がり込ませてゆく<sup>(7)</sup>。こうして健康状態の悪化と反比例するようにして経済的に余裕をもってゆくのである。そして、1929年3月26日付で“gross receipts 1629-6-3”，“final gross profit 1239-16-3”と記された「覚え書き」に見る限りでも、1,000ポンド以上の利益があったことがわかるのである<sup>(8)</sup>。

この研究は、以上のようなロレンスの収支決算のうち、ミレンダ荘に本格的に住み始めるためにロンドンを発った1926年9月27日からヴァンス(Vence)のロベルモンド荘(Villa Robermond)で亡くなる1930年3月2日までの家賃、ホテル代、交通費などの支出について手紙を中心にして調べることを目的としている。なおここでは、エトルリアの古墳墓訪問後にミレンダ荘に戻った1927年4月11日までの約7か月間を対象とする。

ロレンスは手紙の中で、住んだ家の家賃や旅行先で泊まったホテルのホテル代、物価、交通費、列車の出発・到着時間や所要時間などについてかなり詳細に書いている場合が多いので、それらの詳細をたどることによってロレンスの経済状態の一部だけでなく、彼の行動の詳細についても知ることができる。またそれによって、作家として経済的に必ずしも安定していたわけでもないロレンスがなぜ、イタリアをはじめとする外国の国々を放浪できたのか、その理由の一部を具体的な形で知ることができるのである。

## 1 支払金額、鉄道運賃および為替レートについて

表の作成および本文内で用いたデータ収集にあたっては、主として『ロレンスの手紙』(*The Letters of D. H. Lawrence*)の中の金銭に関わる部分をもとにし、『ロレンス年表』(*D. H. Lawrence Chronology*)を参考にしながら滞在期間を特定して支払い金額等を計算した。さらにロレンスが手紙の中

で言及しているホテル代（註で当該手紙の手紙番号を明示した）および『ベデカー・イタリア案内（アルプスからナポリ篇）』（*Baedeker's Italy: From the Alps to Naples*）などを参考に概算で支払金額を推定した。運賃については、ロレンスが手紙の中で言及していることもあるが、計算統一の都合上『ベデカー・イタリア案内』の中で示されている鉄道運賃をもとに計算した。この旅行案内書は1928年出版であるが、当時の為替レートから判断して問題ないものとして使用した。<sup>(9)</sup> 為替レートについては、1927年以前については言及は少ないが、ミレンダ荘に本格的に住み始めた1927年以降は手紙の中でたびたび言及されているので、そこから以下のような表1を作成した。基本換算レートについては、1926年1月9日付の手紙で120リラというレートが出ており、1927年5月19日付の手紙の中でも“The Lira has risen in value lately. We always got 120. . . .”の記述があるので、ここから基本的にラヴェロに行く前を1ポンド=122リラ、ラヴェロ以降を1ポンド=92リラとする二本立てとした。

表1 1927年1月から5月までの為替レート

Date	25/01	20/02	11/03	19/03	28/04	27/05
Lire	141	110	110	96	88	89

## 2 ミレンダ荘までの旅

1926年9月28日、ロレンスとフリーダ（Frieda Lawrence）はそれまで住んでいたロンドンのハムステッド、ウィロビー・ロード30番地（30 Wiloughby Road, Hampstead）を出た。そしてフォークストン（Folkestone）、ボローニャ（Bologna）を経由して翌日パリ（Paris）に着く。<sup>(10)</sup> そこからロレンスはガートルード・クーパー（Gertrude Cooper）に、さっそく次のような印象を書き送っている。

We had a very good journey here, came by Folkestone and Boulogne, and the journey so much easier, if a little longer, because there are fewer people. It was a lovely day on the sea, blue and fresh, and I wouldn't have minded sailing away somewhere not too far only not to America.

Paris is warmer than London was when we left—and very much cheaper. I like it very much. The people are quite friendly, life is somehow simpler and more careless. We shall stay, I expect, till Friday, then travel another day to Switzerland, and stay the night there. Then one more day, to Milan, and from Milan to Florence, also a day. It takes a long time travelling only by day, but it's worth it. (No. 3846)

この手紙からロレンスがフロレンスまで行くのに、ロンドン——フォークストーン——ブローニュ——パリ——ローザンヌ——ミラノ——ボローニャ——フロレンスのルートを取ったことが推測される。直行便で行くとロンドンからミラノまでは約25-27時間、ミラノからフロレンスまでは急行で約7時間<sup>(1)</sup>である。

このルートをたどって9月29日にはパリに到着。10月1日にパリを発って翌日ローザンヌに着き、その後ミラノを経由して10月4日にはフロレンスに着いている。

ベデカーによればロンドンからミラノまでのルートは、カレー——パリ——ローザンヌ経由で料金は7ポンド6シリング11ペンスである<sup>(2)</sup>。したがってここでは便宜上この金額で見積もっておく。さらにミラノからボローニャまでが急行のセカンド・クラスで77リラ（1ポンド=122リラとして約12シリング7ペンス）、ボローニャからフロレンスまでが47リラ（約7シリング8ペンス）なので、ロンドンからフロレンスまでの交通費の合計は8ポンド7シリング2ペンスとなる。これを一覧にしたものが以下に示した表2である。

表2 ロンドンからフロレンスまでの運賃

destination	Lire	£	s	d
London—Milan	—	7	6	11
Milan—Bologna	77		12	7
Bologna—Florence	47		7	8
total		8	7	2

### 3 ミレンダ荘の家賃

すでに述べたとおり、ロレンスが借りたミレンダ荘は年間家賃が3,000リラであった。借り始めたのは1926年5月からで、留守にするときにも「足場」として確保しておいて、友人が来た時に貸すつもりだと言っている<sup>(13)</sup>。それから2年と4か月たった1928年の9月末に明け渡しているので、おそらく最初の年は1ポンド=122リラのレートで約24ポンド11シリング10ペンスを支払い、2年目は92リラのレートで約32ポンド12シリング2ペンス支払ったと思われる<sup>(14)</sup>。残りの4か月分については手紙に記載はないのでどのような支払いをしたのかはわからない。仮に月割計算ということであれば支払いは1,000リラなので約10ポンド17シリング5ペンスの支払いになる。この仮定で計算するとミレンダ荘の家賃の総計は54ポンド1シリング5ペンスとなる。

またロレンスとフリーダは家政婦として16歳のジウリア (Giulia) という少女を雇っていた。そしてその手当が1週間につき20リラであった<sup>(15)</sup>。そして彼女はロレンスとフリーダがミレンダ荘を立ち退くまで働いていたということである<sup>(16)</sup>。彼女が働いた期間を、ロレンスたちが本格的に住み始めた1926年10月から立ち退きの1928年9月までと推測すれば約2年間なので、月80リラとして2年間で1,920リラとなる。そして1ポンド=92リラとしてポンドに換算すれば、約20ポンド17シリング5ペンスとなる。

## 4 ラヴェロまでの旅

ロレンスはミレンダ荘に住み始めてからは外出することもなく、主として『チャタレイ夫人の恋人』の執筆に集中していた。それから半年後の1927年3月19日からイタリア南部のラヴェロ (Ravello) に行く。ブルースター (Earl Brewster) と一緒に3月28日から海岸線沿いにローマまで徒歩旅行に出かけるためであった。<sup>(17)</sup> ラヴェロまでの行程の詳細を正確に知ることはできないが、ベデカーの列車事情から判断してフロレンス—ローマ—ナポリ—ヴィエトリ—アマルフィ—ラヴェロのルートが推測できる。<sup>(18)</sup> ベデカーによればフロレンス—ローマ間では普通列車と急行列車が運行しているが、運賃に大きな差はないので、おそらく急行を使ったはずである。また座席についてはロレンスはファースト・クラスよりもセカンド・クラスを好む傾向があるので二等車を使ったと思われる。<sup>(19)</sup> これをもとにしてルート、所要時間、距離および運賃を一覧にしたものが表3である。<sup>(20)</sup>

表3 フロレンスからラヴェロまでの所要時間、距離、運賃

destination	duration (hours)	distance (miles)	fare				
			L	c	£	s	d
Florence—Rome	6	197	103	0	1	2	5
Rome—Naples	3	134	74	0		16	1
Naples—Vietri	2	34	17	80		3	10
Vietri—Amalfi	1¾	—	7	90		1	9
Amalfi—Ravello	1½	3½	30	0		6	6
total	13	366½	232	70	2	10	7

ロレンスは3月19日にミレンダ荘を発って3月21日にラヴェロに到着し、<sup>(21)</sup> ホテル・パラッツォ・シンブローネ (Palazzo Cimbrone) に滞在するが、ベデカーではこの名前のホテルは紹介されていないので宿泊費についての詳細は分からない。<sup>(22)</sup> ベデカーにあげられているホテルが宿泊のみで15-20リラ、

三食付き (en pension) で40-60リラとなっており、おそらくこれと同程度のホテルに滞在したと考えてよいであろう。<sup>(23)</sup> このホテルへの滞在は3月21日から3月28日までの7泊8日にわたる。<sup>(24)</sup> “en pension” で1日45リラ、7泊として計算すると315リラとなり、1ポンド=92リラの換算で約3ポンド8シリング6ペンスとなる。

## 5 ラヴェロからローマへの徒歩旅行

ロレンスとブルースターは、“I’m leaving on the 28th with Brewster, and we are doing a little walking tour on the coast, towards Rome.” と書かれた No. 3984 (24 March 1927) の手紙に従えば、3月28日にパラッツォ・シンブローネを発ち、徒歩でローマに向かっている。手紙は3月24日を最後に翌月4月4日まで途絶えているので行動の詳細は分からない。ただし4月5日付の No. 3986 の手紙で “We stayed the week-end at Sorrento, and walked to Termini at the end of the peninsula.” と言っていることから、少なくとも週末の4月2日の土曜日まではソレントに滞在し、6キロほど離れたテルミニまで足を伸ばしていたことが分かる。そして同じ4月5日付の No. 3985 の手紙の発信元住所が “19 Corso d’Italia Rome” となっていて、5日にはローマのクリスティーヌ・ヒューズ (Christine Hughes) の家に滞在していたことが分かる。さらに No. 3995 で “I stayed two nights in Christine Hughes, flat in Rome” と述べていて、6日からはエトルリアの古墳墓をめぐる旅に出ていることから、おそらく4日にはソレントないしはテルミニからローマに入ってクリスティーヌの家に着いていたことが分かるのである。ただ、2日もかけずにソレントから200キロ以上離れたローマまで徒歩で行くことは不可能なので、実際に歩いて行ったのかどうかは疑わしい。<sup>(25)</sup> おそらくロレンスとブルースターの徒歩旅行はラヴェロからソレントまでで、その先のローマまではおそらく列車か自動車などの高速な交通手段を使ったはずである。<sup>(26)</sup> たとえば列車を使ったとすればファースト・クラスで

124リラなので、1ポンド=92リラの換算で約1ポンド6シリング11ペンス、セカンド・クラスで84リラ、約18シリング3ペンスとなる。ここではファースト・クラスで計算した。

表4 1927年3月28日からミレンダ荘に戻るまでのロレンスの行動

28 March	Mon.	left Palazzo Cimbrone for Rome
29 March	Tue.	?
30 March	Wed.	?
31 March	Thu.	?
1 April	Fri.	?
2 April	Sat.	Sorrento, walked to Termini
3 April	Sun.	Sorrento
4 April	Mon.	Rome
5 April	Tue.	19 Corso d'Italia Rome
6 April	Wed.	Cerveteri
7 April	Thu.	Tarquinia
8 April	Fri.	Tarquinia
9 April	Sat.	Vulci
10 April	Sun.	Volterra
11 April	Mon.	left Volterra to Villa Mirenda by bus

## 6 古墳墓めぐりの旅からミレンダ荘への帰宅まで

ロレンスはローマに着いた後、4月6日からブルースターとともに心待ちにしていたエトルリアの古墳墓めぐりを始める<sup>(27)</sup>。訪れた先はチェルヴェテリ(Cerveteri)、タルクィニア(Tarquinia)、ヴルチ(Vulci)、ヴォルテッラ(Volterra)などである。この体験をまとめた『エトルリアの遺跡』(*Sketches of Etruscan Places*)には現地に行くまでの交通手段についてかなり詳細に述べられているので、どのような経路をたどったのかが分かる。

### 6.1 チェルヴェテリ

初日の4月6日はチェルヴェテリの遺跡を訪れている。『エトルリアの遺

跡』には、チェルヴェテリは、ローマからピサ (Pisa) 行きの列車で約20マイル離れたパロ (Palo) 駅まで行き、パロ駅から郵便バスで約8.5キロメートル (約5マイル) 行ったところにあると書かれている。<sup>(29)</sup> ベデカーによればイタリアの鉄道料金はキロ単位の料金となっていて、たとえば鈍行列車で100キロメートルの料金は“47 ½ L. first class, 32L. second, 19L. third” (Baedeker xvi) ということであるので、パロまでの20マイル (32キロメートル) の鉄道料金はファースト・クラスの概算でおよそ15.2リラ (3シリング4ペンス) と推測できる。<sup>(29)</sup> またバスについては“Motorbuses . . . ; the fare is 30-40 c. per km.” (Baedeker xvii) とあるので、チェルヴェテリまでの8.5キロメートルのバス料金は1キロメートルあたり0.4リラとして、概算で約3.4リラ、往復で6.8リラ (1シリング6ペンス) と推測できる。

## 6.2 タルクイニア

ロレンスとブルースターはチェルヴェテリで遺跡を見た後、バスでパロ駅に戻る。だが次の予定地タルクイニアがチェルヴェテリの北にあるので、ローマには戻らずに、チヴィタヴェッキア (Civita Vecchia) に行く。ベデカーによればピサからパロまで“179M.”でピサからチヴィタヴェッキアまでは“158 ½ M.”なので、パロからチヴィタヴェッキアは20.5マイル (32.8キロメートル) となり、<sup>(30)</sup> 料金はファースト・クラスの概算で15.58リラ (3シリング5ペンス) となる。

チヴィタヴェッキアについた二人はホテルに泊まるが、ホテルの宿泊料金はわからない。ベデカーによれば、イタリアのファースト・クラスのホテルがシングルで1泊25-50リラぐらいであることと (Baedeker 14), 『エトルリアの遺跡』の中での記述から、ロレンスたちが泊まったホテルは少なくとも一流ホテルではないようなので、高く見積もっても25-30リラぐらいだろう。ただしホテルでの食事については、昼食が20-30リラ、ディナーが25-40リラなので (Baedeker 14), 食事代を含めるとおよそ50リラ (10シリング10ペンス) になる。

『エトルリアの遺跡』に従えば、翌朝は8時の列車でタルクィニアに出発する。これもやはりベデカーによればピサからタルクィニアまでが“146M.”で、ピサからチヴィタヴェッキアまでは“158 ½ M.”なのでタルクィニア―チヴィタヴェッキア間は12.5マイルとなり、料金は概算で9.01リラ（1シリング12ペンス）となる。<sup>(31)</sup>

目的地であるタルクィニアの遺跡まではバスが通っていて、距離は3マイル（4.8キロメートル）ほどなので、料金は約1.92リラ（5ペンス）となる。

タルクィニアで二人が宿泊したホテルは家族経営のような小さなホテルなので、高くてもおそらく20リラぐらいであろう（Baedeker 20）。二人はここで2泊してタルクィニアの墳墓を見て歩き、朝ヴルチに向かっている。食事代を入れても一人の合計は70リラ（15シリング3ペンス）ぐらいですんだであろう。

### 6.3 ヴルチ

ヴルチは、隣駅のモンタルト・ディ・カストロ（Montalto di Castro）で降りて、そこからバスでそれほど遠くない丘の上の町に行き、そこからさらに8キロほどのところにあるという（*Sketches of Etruscan Places* 137）。モンタルト・ディ・カストロまではタルクィニアから12マイル（19.2キロメートル）なので、おそらく鉄道料金は9リラ（1シリング11ペンス）ぐらいだろう。モンタルト・ディ・カストロ駅から丘の上の町まで行くのに、どのくらいバスに乗ったのかわからないが、地図で確認する限りではそれほど遠くないので、3-4キロメートルぐらいと仮定すれば、1.6リラ（4ペンス）になる。帰りも同じルートを通ったであろうから料金は単純にこれらの往復分3.2リラ（8ペンス）になる。

丘の上の町からヴルチまでの8キロメートルの道のりを行くためには馬車を使うしかなく、交渉の結果、ヴルチ行きの二輪馬車を50リラでやとう。鉄道料金やバスの料金に比べるとかなり割高である。ヴルチでは、墓の中を見るためにろうそくが必要だと言われ、これを買うのに1.5リラ（4ペンス）

を使う (*Sketches of Etruscan Places* 146).

#### 6.4 ヴォルテッラ

ヴォルテッラまで行くためにはまず、チェチーナ (Cecina) まで列車で行って、そこから支線に乗りかえ、サリーネ・ディ・ヴォルテッラ (Saline di Volterra) を通って、さらに終点まで行き、そこからまたバスで遺跡があるところまで行くという (*Sketches of Etruscan Places* 157)。ベデカーによれば、モンタルト・ディ・カストロからチェチーナまでは“100 ½ M.” (160.8 キロメートル) なの<sup>(32)</sup>で、ファースト・クラスで76.38リラ (16シリング7ペンス) となる。またチェチーナ-ヴォルテッラ間は29M. (46.4キロメートル) であるが支線なのでファースト・クラスがあるのかどうかはわからない。セカンド・クラスで計算すれば14.84リラ (3シリング3ペンス) となる。ヴォルテッラの遺跡まで行くのにはさらにバスに乗って行かねばならないのだが、それほど遠いところではないので、バスの料金はおそらく多く見積もっても1リラ (3ペンス) ほどであろう。

ヴォルテッラのホテルには1泊して、食事はブルースターと二人で取ったということから、食事代を含めた支払いは50リラ (10シリング10ペンス) ほどであったと思われる。

翌朝二人は博物館に行く。入場料は日曜日と祝日は無料で、平日は“2-12L.” (Baedeker xxiii) ということから10リラ (2シリング2ペンス) ほどは払ったのであろう。そして手紙によれば、ロレンスはヴォルテッラから5時間もの間バスに揺られてフロレンスに着いたという。ヴォルテッラからフロレンスまでは約80キロメートルあるので、ベデカーに従ってキロあたり0.4リラで計算すれば32リラ (6シリング11ペンス) となる。実際には長距離の場合は割引かれてもう少し安かったのかもしれない。

## おわりに

ロレンスの足どりを追いながら調べてきた約半年の支出の詳細をまとめたものが表5である。ここでは日常生活での細かな支出は含まれていないが、ロレンスは贅沢をするようなことはなかったと思われるので、出費は食費など最低限のものに限定されていたであろう。この表でみるかぎり、イタリア国内をあちこちら旅行しているわりにはポンド換算しても20ポンドほどであることから、経済的にはそれほど負担にならなかったのではないかと考えられる。

『海とサルディニア』(*Sea and Sardinia*)のなかで、ロレンスが出会ったイタリア人が、

Ah, a fine thing to be English in Italy now. Why? —rather tart from me. Because of the cambio, the exchange. You English, with your money exchange, you come here and buy everything for nothing, you take the best of everything, and with your money you pay nothing for it. (175)

と言って、イタリアでのポンドのあまりの強さを皮肉っている。イギリス人がただ同然で買い物をしているというのである。ロレンスがサルディニアを訪れたのは約6年前の1921年1月であり、当時の為替レートは1ポンド100リラを超えていた。しかしロレンス自身はイタリアの物価の高さをしきりに嘆いている。<sup>(34)</sup>一時は1ポンド140リラを超えていた為替レートがみるみる下がって行って100を切り、90を切り、80リラ代へとじわじわ落ちてゆくのを目のあたりにして、ロレンスも気が気ではなかったはずである。それでもまだまだポンドの力は強く、おそらくこの7か月あまりの生活費は以下にあげた総計の2倍に上ることはなかったであろうと思われる。おそらくイタリア

での生活費は本国イギリスでのそれに比べれば、ずいぶん安かったはずである。それはたとえばロンドンの郵便配達人の1924年の年収が160ポンドで<sup>(35)</sup>あり、おそらくそのほとんどが生活費に消えていたであろうということを考えると、ロレンス自身はまだまだ強いポンドの恩恵にずいぶん浴していたのではないかと思われるのである。

なお、今後の課題としては、ロレンスの収入の詳細について手紙などを中心に追跡することで、収支関係を明らかにし、ロレンスの経済基盤の詳細を解き明かす作業が必要である。

表5 1926年9月27日から1927年4月11日までの旅費等

Date	destination or hotel	Lire	fare or tariff		
			£	s	d
29/09/26	London—Florence		8	7	2
19/03/27	Florence—Ravello	232.70	2	10	7
21/03/27	Palazzo Cimbrone	315.00	3	8	6
28/03/27	Sorrento—Rome	124.00	1	6	11
06/04/27	Rome—Palo	15.20		3	4
	Palo—Cerveteri	6.80		1	11*
	Palo—Chivitavecchia	15.60		3	5
	Hotel at Civitavecchia	50.00		10	10
09/04/27	Civitavecchia—Tarquinia Stn.	9.01		1	12
	Tarquinia Stn.—Tarquinia	1.92			5*
	Hotel at Tarquinia	70.00		15	3
	Tarquinia—Montalto di Castro	9.00		1	11
	Montalto di Castro—Vulci	103.20	1	2	5*
	candle	1.50			4
	Montalto di Castro—Cecina	76.28		16	7
10/04/27	Cecina—Volterra	14.84		3	3
	Volterra—tombs	1.00			3
	Hotel at Volterra	50.00		10	10
	Admission to the museum	10.00		2	2
11/04/27	Volterra—Florence	32.00		6	11
	total	1138.05	20	15	0
	Rent for Villa Mirinda (2 years & 4 monhts)	7000	54	1	5
	Payment for the maid (2 years)	1920	20	17	5

\* Asterisks are return fares

## 〔註〕

- (1) 実際には1926年5月から借りて住み始めているが、2か月あまり住んだ後に一時イギリスに戻っていた。また No. 3713 (15 May 1926) に “We’ve taken the top half of this old villa out in the country about seven miles from Florence” とある。
- (2) No. 3713 に “the rent is only 3,000 Liras for a year—which is twenty-five pounds—I took the place for a year” とある。ちなみに No. 1543 (13 May 1918) の手紙では、約2年前に年間5ポンドという格安の家賃で手に入れた Cornwall の Higher Tregathern の家賃が21ポンドに上がり、正直言って払う余裕がないと言っている。同じ年に妹は年間65ポンド家賃を払っている (No. 1565, 28 April 1918) と言っているのだから、それから8年後に25ポンドの家賃であればイギリスのそれに比べると安いかもしれない。なお、書簡番号はすべて *The Letters of D. H. Lawrence* の中で与えられているものである。
- (3) ロレンスは1928年6月まで住んだ後イタリア及びスイスなどを旅し、No. 4673 (28 September 1928) では “I think we are definitely giving up the Miranda—wonder where we’ll pitch!” と述べており、最終的には9月末で Villa Miranda を明け渡した。
- (4) 米国ノースウェスタン大学図書館所蔵。この資料は “Memoranda” と書かれたロレンスの手書きのメモ帳で、本研究はマイクロフィルムからの複写原稿をもとにしている。なお、この資料の構成および収支決算については佐藤治夫著「D. H. ロレンスの収支決算——*D. H. Lawrence Memoranda Book* に見られる収支」(『日本大学歯学部紀要』32号, 日本大学歯学部 2004年) に詳細な研究があり、それを参照させていただいた。
- (5) John Burnett, *A History of the Cost of Living*, (Penguin Books, 1969), 298-301. この本では、ロレンスがイタリアに住んでいた1927-28年ごろの収入について知ることはできないが、この本の資料から見ると1924年から10年間ぐらいは大きな変動が見られないので、比較の対象とした。
- (6) “Memoranda” には予約者の名前が少なくとも200名以上記載されている。
- (7) 例えば No. 5524 (14 February 1930) には、Titus からの *Lady Chatterley’s Lover* の印税の支払いが “Thanks for letter and cheque for 3,000 frs. You have now paid me 10,000 + 10,000 + 10,000 + 3,000 frs. in cheques on your account, then 7,372 in a transferred cheque, and 300 in notes: total 40,372 frs. There were due to me, if I remember rightly, 41,000 frs.” と書かれていて、次々に大金が入っていることがわかる。なおフロレンス版は1冊2ポンドで1,000部、廉価版は1冊1ポンドで200部出版された。

- (8) この総収入はフロレンス版1,000部の売り上げだけでなく、続いて出され、ロレンスが“2nd edition”と呼んでいる廉価版200部（1冊1ポンド）の売り上げも含まれている。
- (9) Baedekerの『イタリア案内』は大きく分けて *Northern Italy* (1868), *Central Italy and Rome* (1867), *Southern Italy* (1867) および *Italy from the Alps to Naples* (1904) の4種類があり2年ないしは3年ごとに改訂されていたが、第一次大戦をはさんで1914年以降1927年まで改訂版が出ていない。
- (10) ロレンスはこれに先立つ約6年前の1920年7月16日付の手紙No. 2039で、Milan までの行程を “I came Charing X. 8.0 a.m.—Folkestone—Boulogne dep. 1.40 (thereabouts) : arrive Paris 5.30 p.m. or so : take a taxi or any cab to Gare de Lyon (fare about 3/6 : they’ll take English silver gladly : 4/- or 5/- at most)—eat at the Gare de Lyon—(upstairs they give dinner, downstairs cold meat and beer etc)—leave 9.30 p.m. : arrive Modane about midday next day—frontier—luggage inspection and passport—they won’t bother you at all. You can eat in Modane station restaurant—leave Modane about 3.0—arrive Turin (Torino) about 7.0—change, and arrive Milan (Milano) at about midnight—where I hope I’d be at that crowded station.” と細かに記している。したがって、今回もこれと同じルートをとったものと思われる。
- (11) Milan から Bologna までは “134 M. Express in 3 ½-4 ½ hrs. (111 L., 77 L. 50 c., 44 L.) ; ordinary train in 6-7 hrs. (101 L., 68 L., 40 L).” (Baedeker 125), Bologna から Florence までは “82 ½ M. Express in 3 ¼-4 ¼ hrs. (69 L. 50 c., 47 L., 28 L.) ; ordinary train in 5 hrs. (62 L. 50, 42 L. 50c., 25 L.)” (Baedeker 142).
- (12) Baedekerによれば Paris 経由 Milan までのルートは “Via Calais, Paris, and Lausanne, 806 ½ M., by the Simplon-Orient Express (train de luxe, supplementary fare payable) daily in 25 hrs. (7l. 6s. 11d.) and the Direct Orient Express in 27 hrs. (fares as above)” (Baedeker xv) である。ただし、ロレンスは Calais にではなく Folkestone から Boulogne に渡っているのも、Paris から Milan までについてのみこのルートを利用したと思われる。また直行便を使わないで、Lausanne に1泊して（実際には2泊 “We have been here a fortnight now, stayed a day or two in Paris, and two days in Lausanne”, No. 3868, 18 October 1926) から Milan, Florence に行くということなので鉄道料金はもう少し安かったのではないかと推測される。
- (13) No. 3713 (15 May 1926) “Even if we go away, we can always keep it as

a pied à terre and let friends live in it.”

- (14) No. 1996 (20 April 1927) で再契約について “I haven’t settled yet about staying on in this house. I must, before May 6th. But they asked me to pay more rent . . .” と述べて1926年5月6日から借りていた契約更新の意思を聞かれていることが分かるが、No. 4000 (27 April 1927) で “I’m taking this house for another year, because nothing else occurs to me to do.” と言って家賃の値上がりについては言及していないので、おそらく据え置きで話がまとまったのであろうと思われる。
- (15) イタリア人の少女ジウリア・ピニ (Giulia Pini) は16歳頃からロレンス夫妻が住む Villa Mirenda でメイドとして働いた。 “. . . she was paid 20 liras a week as a maid. . .” (*D. H. Lawrence Review*, 30. 1, 2001) 48. また No. 4418 (5 May 1928) でも “We give Giulia 20 Liras a week but she doesn’t cook for us. She comes at 7.0, makes coffee, washes up and cleans a bit, and goes home about 10.0. Then comes again at 1.30 or so, and washes up. But if I were you, I’d have her from 7.0 till 2.0, and give her 50 Liras a week and let her do the washing—anyhow all but sheets.” と述べている。彼も妻のフリーダも実際にはこの少女のことをずいぶん気に入っていた。
- (16) “Both Lawrence and Frieda wanted the girl to go with them when they left the Villa Mirenda, but her father would not let her.” (*D. H. Lawrence Review*, 30. 1, 2001) 48.
- (17) No. 3984 (24 March 1927) でロレンスはこの旅行を “a little walking tour” (ちょっとした徒歩旅行) と表現しているが、Ravello から Rome まで直線距離で140マイル (224キロメートル) ある。手紙は3月25日から4月4日までについては何も述べていないのでどのような行程をとったのかは分からないが、3月28日に Ravello を発ち Sorrento および Termini まで歩いたことは No. 3986 (5 April 1927) の手紙からも明らかである。
- (18) No. 4040 (9 June 1927) で Perugia までのルートについて “I will do a trip to Cortona, Arezzo, Chiusi, Orvieto, Perugia. . .” (地理的な順序は実際には Arezzo, Cortona, Perugia, Chiusi, Orvieto) と述べているのでこのルートを選んだと思われる。
- (19) たとえば No. 2419 (14 January 1922) の手紙で “If you can bear the weariness of long journeys, you can travel second class—there’s very little difference. Get Cooks to book you a room in Paris and wherever else you wish to stay. Paris to Turin is 24 hours—quite bearable.” と述べているし、No. 2465 (19 February 1922) でも船旅ではあるが “We are second class

and it is quite perfect, because the people are so quiet and simple and nobody shows off at all.”と二等車の良さをかっている。また三等車についても *Sea and Sardinia* の中で “It is much nicest, on the whole, to travel third-class on the railway. There is space, there is air, and it is like being in a lively inn, everybody in good spirits.” (70) と行ってその良さを買っている。

- (20) Baedeker では Naples から Salerno までは “34 M. in 1 ½-2 ¼ hrs. (26 L. 50, 17 L. 80, 10 L. 80 c.” (452) となっている。Salerno—Vietri 間は地図上で約 2 マイルの差があるが、ここでは概算が目的なのでその差を計算に入れないこととする。また、Amalfi まで行くためには Baedeker に “Passengers for Amalfi alight at Vietri” (452) とあるように Naples から Salerno 行きの列車に乗り、途中 Vietri で降りてバスで Amalfi まで行くことになる。なおバスは 1 日 2-3 便が運行している。
- (21) No. 3982 (24 March 1927) で “I’ve been here since Monday” と述べていることから、彼が到着したのは 3 月 21 日の月曜日だったことがわかる。
- (22) ロレンスが当時滞在したホテルは、現在では Hotel Villa Cimbrone という名の高級ホテルで、ホームページでは “The Villa has been home to many famous names from the world of art, science and politics. It was a meeting place of the English on the Amalfi coast and for the famous London Bloomsbury set. To mention just a few illustrious guests: E.M. Forster, Lytton Strachey, Keynes, Henry Moore, Elliot, Crick, Piaget, Virginia Woolf, D.H. Lawrence, the Duke and Duchess of Kent and Winston Churchill.” (<http://www.villacimbrone.com/en/storia2.php>, 5 May 2009) と紹介されている。Baedeker では Palazzo Cimbrone は “the recently restored Palazzo Cimbrone” (458) と述べられているだけでホテルとしては紹介されていない。ただし Palazzo Cimbrone には有名な Belvedere Terrace があるので “Belvedere” (458) として紹介されているホテルがそれかもしれない。
- (23) 同じ Ravello にあるホテルで、たとえばロレンスが 1926 年 3 月 11 日に泊まったことのあるホテル Palumbo は “50 beds at 16-20, B. 5, L. 18, D. 22, P. 40-60” (Baedeker 458) である。
- (24) ロレンスは No. 3976 (17 March 1927) で Piazza Mentana にある Pensione Balestri というホテルが “en pension” で約 30L. なので “they’re still pretty cheap” だと述べている。ここから判断すれば 40L. の部屋は支払いの許容範囲であると考えられる。

- (25) この点について、同行したブルースターは *D. H. Lawrence: Reminiscence and Correspondence* (Martin Secker, 1934) の中で “One day, after the promised visit to us in Ravello, Lawrence and I drove out to the end of the Sorrentine Peninsula returning to Sorrento on foot.” (120), “From Sorrento we started on our Etruscan pilgrimage, beginning with the museum of the Villa di Papa Giulia in Rome” (122) と述べているだけなので詳しいことはわからない。
- (26) たとえば Naples から Rome までは “155 M. Express in 4 ½-6 hrs. (124 L., 84 L., 49 L. 50 c.” (Baedeker 385) である。
- (27) 手紙ではたとえば No. 3970 (8 March 1927) “I want to go the Etruscan places near Rome—Vei and Cervetri—then on the maremma coast, north of Cività Vecchia and south of Pisa—Corneto, Grosseto etc—and Volterra. The Etruscans interest me very much . . .” と述べられていてロレンスが心待ちにしていたことが分かる。
- (28) *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays* (Cambridge University Press, 1992) では “It was not far to go—about twenty miles over the campagna towards the sea, on the line to Pisa.” (10) であるが、Baedeker によれば、Pisa—Rome 間が “209M.” (211), Palo までは “179M.” (213) なので Rome から Palo までは約30マイルになる。Cerveteri までは “5 ½ M.” (213) で、乗り合いバスが出ているとあるので、ロレンスの記述と合致している。
- (29) ロレンスが三等車を好んでいたことから、二人はサード・クラスの切符で行ったかもしれないが、ロレンスが No. 3897 (24 November 1926) の手紙で “How rash he [Brewster] is, always to take a ticket, first class, to his Paradise!” と言っているので、ファースト・クラスを使った可能性も考えられる。
- (30) *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays* では “It is an hour or more to Cività Vecchia. . .” (29) と書かれているので、30キロメートルほどの距離を1時間あまりかけて進んだことがわかる。なお、Baedeker では Cività Vecchia は “Chivitavecchia” と綴られている。
- (31) Pisa から Civitavecchia までは “158 ½ M.” で Tarquinia までは “146M.” である (Baedeker 213)。
- (32) Pisa—Tarquinia 間が “146M.”, Pisa—Cècina 間が “33 ½ M.”, さらに Montalto di Castro—Tarquinia 間が “12M.” であることから Montalto di Castro—Cècina 間は 100 ½ M. となる (Baedeker 212-3)。
- (33) ロレンスの手紙 No. 3994 (4 April 1927) には “I got home all right on

Monday night—pretty well shaken up, after five hours in that bus. But I caught the last train, by the skin of my teeth.”とある。またブルースターは “At Volterra our Etruscan pilgrimage ended. Lawrence climbed into the great motor-bus for Florence, and I took the train for southern Italy.” (*D. H. Lawrence : Reminiscence and Correspondence* 124) と書いている。

(34) ロレンスはこの青年への反論の形で “Even with the exchange at a hundred and three, we don’t live for nothing. . . . Compare the cost of things in England with the cost here in Italy, and even considering the exchange, Italy costs nearly as much as England.” (*Sea and Sardinia* 176) と言ってイタリアの物価の高さと暮らしにくさをしきりに嘆いている。またたとえば No. 4000 (27 April 1927) の手紙では “The exchange is down to 88, and everything dearer than England—no fun.” と、さらに No. 4040 (9 June 1927) の手紙で “The worst of travelling now in Italy, it costs so much with the exchange where it is.” など言って目の前でポンドが下がってゆくことに対する危機感をつのらせている。

(35) Burnett, *A History of the Cost of Living* 301.

〔引証資料〕

Baedeker, Karl. *Italy : From the Alps to Naples*. George Allen & Unwin Ltd., 1928.

Brewster, Earl and Achsa. *D. H. Lawrence : Reminiscence and Correspondence*. London: Martin Secker, 1934.

Burnett, John. *A History of the Cost of Living*. Penguin Books, 1969.

Ellis, David. *D. H. Lawrence : Dying Game 1922-1930*. Cambridge University Press, 1998.

Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence*, III, IV, V, VI, VII. ed. James T. Boulton, Warren Roberts, Elizabeth Mansfield, Lindeth Vasey, Margaret H. Boulton, Gerald M. Lacy and Keith Sagar. Cambridge University Press, 1984, 2002, 2002, 2002, 2002.

—*Sea and Sardinia*. Cambridge University Press, 1997.

—*Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*. Cambridge University Press, 2002.

Michelucci, Stefania. “The Peasants of the Villa Mirenda.” *D. H. Lawrence Review*, 30. 1 (2001) : 43-54.

Preston, Peter. *A D. H. Lawrence Chronology*. St. Martin’s Press, 1994.